



Sex and Race in Okinawa (TIME, August 27, 2001) を読む：ステレオタイプ研究への一試論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 相田, 洋明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006135

“Sex and Race in Okinawa”(TIME, August 27, 2001)を読む — ステレオタイプ研究への一試論 —¹⁾

相 田 洋 明

1. 研究の目的と方法

メディアが受け手に与える影響の一つにステレオタイプの形成が挙げられる。ステレオタイプとは、*Webster's Third New International Dictionary*によれば、“something repeated or reproduced without variation: something conforming to a fixed or general pattern and lacking individual distinguishing marks or qualities; esp: a standardized mental picture held in common by members of a group and representing an oversimplified opinion, affective attitude, or uncritical judgment (as of a person, a race, an issue, or an event)”であり、無論様々な社会事象がその形成に与るが、メディア社会の進展に伴い、世界に関するますます多くの情報をメディアから受け取る我々にとって、マス・メディアで繰り返し述べられる事柄(“something repeated”)が、ステレオタイプ形成に大きな影響力を持つことは疑いを容れない。

本論では、ステレオタイプ研究の一試論として、その「メディアで繰り返し述べられる事柄」を検証する。具体例として、最近の*TIME*誌(アメリカ国内版)日本関連記事のうち、沖縄米兵のレイプ事件を扱った“Sex and Race in Okinawa”(August 27, 2001)を取りあげ²⁾、この記事が何を伝えているのか、その中心的なテーマを明らかにし、それらが90年以降³⁾の*TIME*誌の日本関連記事においても繰り返し現れてきたテーマであることを、テキストの精読⁴⁾を基礎に論証する。

2. “Sex and Race in Okinawa”の内容

まず、記事の内容をパラグラフ毎に要約しながら確認する。

第1パラグラフ、「Timothy Woodlandは極めて困難な状況にある。24歳の空軍軍曹である彼は、沖縄の監獄で一年にも及ぶ可能性のある裁判にのぞんでいる。彼は勾留期間をすでに終えている(彼の場合は15日間だが、長い場合は23日にもわたる場合がある。その間容疑者は弁護士の付き添い無しで尋問される)。英語の書物、聖書、アメリカ式の食事は認められているが、煙草、テレビ、また、(華氏100度以上になることがあるのに)エアコンは無い。友人や家族と話をしたり、手紙を書くことは認められていない。彼の母、Arlene Jordanも逮捕以来、息子と会話ができない。このアフリカ系アメリカ人は、日本人女性をレイプした容疑で起訴されているのである。もし有罪になれば最長15年間日本の刑務所にいることになる。」第2パラグラフ、「この裁判は、ナショナリスティックな政治、騒々しく騒ぎ立てるメディア、半世紀にも及ぶ沖縄の悲しみ、そしてそれら全ての下を流れるレイシズム(“an undercurrent of racism”)の激しい渦の中に巻き込まれている。」この第1第2パラグラフでは、勾留期間や取

り調べ、監獄における人権の軽視が示唆され、また、この裁判を巡るレイシズムが指摘されている。

第3パラグラフ、「沖縄は極めてアメリカナイズされている。アメリカを思い出させるものが至るところにある。」第4パラグラフ、「沖縄を訪れる日本人女性にとって最大の魅力はアメリカ人である。沖縄はamejo(アメリカ人を好む日本人女性)とkokujoの本場である。」第5パラグラフ、「kokujo(黒人を好む日本人女性)は、黒人兵を魅了しようと着飾っている。有色人種に対する嫌悪で悪名高い日本(“a country notorious for its disdain for people of color”)で、黒人好みのサブカルチャーの出現は多くの問題を引き起こしている。」この第3、4、5パラグラフでは、極めてアメリカナイズされている沖縄だが、日本人女性にとって最大の魅力は、アメリカ人、とりわけアメリカ黒人である、とされ、amejo、kokujoという日本語⁵⁾が印象的に使われている。また、再び日本のレイシズムに触れられている。

第6パラグラフ、「日本人女性に対するgeishaのステレオタイプはなお西洋世界には根強い。このステレオタイプに惹かれて、沖縄を駐屯地として希望するアメリカ兵も多い。」

第7パラグラフ、「この裁判には、レイシズムとセクシズムの双方が関係している(“Both racism and sexism are relevant because they may dictate this case.”)。アメリカではレイプ事件の場合、被害女性のライフスタイルや性的生活史は考慮に入れられないが、日本ではそれらが大いに関係する。告発者がkokujoであるこの事件では、知られている状況から判断して、もしWoodlandが日本人男性であれば起訴されなかつただろう(“Given what is known about the events surrounding the incident, the case against Timothy Woodland may never have led to his indictment if he were a Japanese man.”)。」この第7パラグラフでは、この事件の場合、日本のセクシズムゆえに、被告発者が日本人男性なら起訴されなかつただろう、しかし、日本のレイシズムゆえにアフリカ系アメリカ人のWoodland氏は起訴されたのだ、という主張がなされている。

第8、9、10、11パラグラフでは、実際の6月29日未明の事件の経緯が述べられている⁶⁾(本論文では事件そのものには触れない)。第12パラグラフ、「7月2日に逮捕状が発行されてから4日間はWoodlandの身柄が日本側に引き渡されなかつた。これは、起訴後の身柄引き渡しを規定した日米地位協定による。長期にわたる隔離された勾留期間があまりにも過酷だとアメリカ側は考えている(“the long, isolating detention period, which the U.S. considers overly harsh”)のである。もっとも95年の少女暴行事件以来、運用は改善されている。」第13パラグラフ、「この事件が政治問題化し、Woodlandは7月6日に逮捕され、15日後にレイプの容疑で起訴された。」この第8パラグラフから第13パラグラフでは、事件の経緯、および、Woodland氏の逮捕から起訴までが述べられている。また、第12パラグラフでは、再び日本の勾留期間の過酷さについて触れられている。

第14パラグラフ、「沖縄の新聞は米兵を犯罪と結びつけたがる(“To read the Okinawa papers now, you would think the main mission of U.S. military personnel there is to engage in crime sprees.”)が、統計の数字では米兵の犯罪率は特に高くない。」第15パラグラフ、「日本のメディアは米兵のばかげた軽犯罪を漏らさず報道する。」第16パラグラフ、「米兵

による深刻な犯罪(特に性犯罪)も起きているが、黒人によって犯された犯罪は特に注目され記憶される(“the crimes committed by blacks are particularly noted and remembered by Okinawans”。) 第17パラグラフ、「Woodlandの弁護士Eddie-Callagainは、容疑者が黒人兵である場合、沖縄の人々はそれだけで有罪だと見なしがちである(“When a suspect is black and from the military, people here assume he must be guilty”)と述べている。彼女はまた、日本では容疑者は無罪だと証明されるまでは有罪だ(“Here you're guilty until proved innocent”)、刑事裁判制度は検事によって運営されていて弁護士は傍観者にすぎない、とも述べている。」第14、15パラグラフでは、日本のメディアの米兵と犯罪を結びつけたがる傾向が指摘されている。第16、17パラグラフでは、黒人による犯罪はとりわけ注目され、黒人というだけで有罪だと考えられがちであると再び日本のレイシズムに触れられている。また、第17パラグラフの後半では、日本の刑事裁判では被告が極めて不利であることが述べられている。

第18パラグラフ、「日本ではレイプ事件の際、被害女性が(特に活発な性生活を送っていた場合)裁判に勝つのは容易ではない(“in Japan, winning a rape case is never a cinch—particularly for a woman who admits to having an active sex life”。) 第19パラグラフ、「この女性はそのライフスタイルゆえに、世論やメディアで非難されている。日本では、レイプ被害女性に対する古くさい偏見があつて(“Old-fashioned attitudes impose shame and blame on the victim.”)、レイプ事件が警察に届けられる割合が極めて低い。」第20パラグラフ、「他のamejoやkokujoたちもこの女性を批判している。」第21パラグラフ、「amejoやkokujoたちは、この事件で自分たちにも批判的な視線が集まったと感じている。」この第18から21パラグラフでは、レイプ事件の際、被害女性が裁判に勝つのは容易でなく、この女性を含めしばしば女性の側が非難されると日本におけるセクシズムの傾向が指摘されている。

第22パラグラフ、「基地周辺の性的娯楽施設は、第二次大戦後生まれ、現在まで続いている。」第23パラグラフ、「昔も今も基地周辺のナイトライフでは、黒人と白人は分離している。」第24パラグラフ、「日本人男性よりも米兵を好むamejoたち。」第25パラグラフ、「日本の大学生たちの反基地、反性暴力デモ。」第26パラグラフ、「米兵漁りをする日本人女性たち。」これら記事の最後の部分では、第22、23パラグラフで、基地周辺の性的娯楽施設やナイトライフが、また、第24、26パラグラフでは、米兵を好み、積極的に求めようとするamejo達が描写されている。それゆえ、間に挟まれた第25パラグラフはどこか滑稽感が漂う構成になっている。

3. “Sex and Race in Okinawa”の5つのテーマ

以上がパラグラフ毎の内容であるが、この記事は、第8から13パラグラフまでの、事件の経緯とWoodland氏の逮捕から起訴までを報じた事実報道に当たる部分を除けば、その他の部分は5つのテーマで構成されていると考えられる。すなわち、(1)第1パラグラフと第17パラグラフで扱われている、「日本における勾留期間や取り調べ、裁判における人権の軽視」、(2)第2、7、16、17パラグラフで扱われている「日本のレイシズム」、(3)第3、4、5、6、22、23、24、25、26パラグラフ(もっとも、第3と第25パラグラフはつながりのパラグラフという位置づけであるが)で扱われているamejo、kokujo、またgeishaといった言葉で描写される「性的

イメージに彩られた日本人女性」、(4)第7、18、19、20、21パラグラフで扱われている「日本のセクシズム」、(5)第14、15パラグラフで扱われている、「米兵あるいはアメリカと犯罪を結びつけたがる日本人」である。

4. 1990年以降の *TIME* 誌日本関連記事における上記5つのテーマ

次に、以上の5つのテーマが *TIME* 誌の1990年以降の日本関連記事で扱われたことがあるかどうか、検証する。

(1)「日本における勾留期間や取り調べ、裁判における人権の軽視」に関しては、例えば、95年の米兵による沖縄少女暴行事件を扱った“Rape of an Innocent, Dishonor in the Ranks” (95/10/2)において、“a country where police solve the vast majority of cases by pulling confessions out of suspects, a record not achieved by gentle means”と、日本の警察機構における自白偏重の捜査方法の問題が指摘されていた。

(2)「日本のレイシズム」に関しては、アメリカ人の対日観、および日本人の対米観を特集した92年の“1. Japan in the Mind of America 2. America in the Mind of Japan” (92/2/10)において、「排他的で同質性の高い日本 (“Japan an exclusive, homogeneous Asian ocean-and-island realm”）」、「日本の文化的・人種的同質性を持たないアメリカはハンディを負っていると多くの日本人は考えている (“many Japanese contend that America is handicapped because it does not mirror Japan's cultural and racial homogeneity”）」、「アメリカの人種的・文化的多様性は強みではなく弱点であると日本人は信じる傾向がある (“They [=Japanese] tend to believe that America's racial and cultural diversity are weakness, not strengths.”）」と同質性の高さを誇る日本の姿が描写され、「人種的同質性が統一を生み出しているという神話が日本人以外に対する差別の根本にある (“the myth that racial homogeneity engenders unity is the root of discrimination against anyone who is not Japanese”）」、「日本が行うアメリカ批判には、時折ほとんど人種差別と言っていい場合がある (“At times, criticism of America borders on racism”）」と日本のレイシズムが指摘されている。

また、アメリカ以外に対してもとりわけ韓国朝鮮人に対する偏見が指摘されることは多く、例えば、日本の在日韓国朝鮮人問題を扱った90年の“*No Longer Willing to Be Invisible*”(95/5/28)において、「韓国人に対する日本の根強い偏見 (“Japan's lingering prejudice against Koreans”）」、「韓国人に対する無知と優越感 (“ignorance, a superiority complex toward Koreans”）」と述べられ、また、インターネット産業の旗手として孫正義を特集した99年の“*Emperor of the Internet*” (99/12/6)においても同じように、「日本は外国人(特に韓国人)に対して寛容でない (“a place with little tolerance of foreigners [particularly Koreans]”）」とされている。

(3)「性的イメージに彩られた日本人女性」に関しては、例えば、日本の長引く不況と日本経済の奇跡の終焉を論じた96年の“*The Failed Miracle*” (96/4/22)において、“The strange, tawdry phenomenon of *terekura*, or a telephone-sex clubs, also reflects the deterioration in the lives of young Japanese. A large number of high school girls in the big cities ... work

occasionally for the services, and some unknown portion of those act as prostitutes as well.”と、奇妙で低俗な現象として日本のテレクラが取りあげられ、女子高校生が売春行為を行うことさえあると日本の若者の墮落と結びつけて論じられている。

(4)「日本のセクシズム」に関しては、日本人の過去の戦争に対する歴史認識を論じた91年の“Fleeing the Past?” (91/12/2)において、「日本ではたいていの男は、女性になお、お茶くみ程度の仕事しかさせたくない(“a nation where most men still prefer women to hold jobs that allow them to do little more than serve tea”）」とされ、また、先ほども引いた“The Failed Miracle”においても、「夫たちは家事をほとんどせず、妻たちに任せっぱなしである(“Husbands rarely perform family duties, leaving them to their wives.”)」と日本男性の意識の遅れを指摘している。これも先ほど引いた“1. Japan in the Mind of America 2. America in the Mind of Japan”では、日本社会を「厳格な家父長制的社会(“the strict paternalistic society”）」と描写し、さらに、アメリカ三菱自動車のセクハラ問題を報じた96年の“Assembly-Line Sexism?” (96/5/6)では、日本の企業経営に関して、「性差別的な日本の経営手法(“sexist Japanese management practice”）」、「日本の経営者社会はアメリカよりもはるかに性差別的であり、経営陣に女性はほとんどいない。(“Japan’s manager society is far more sexist than America’s. In Japan women are almost unheard of in management.”)」と述べ、日本文化を「男性支配の文化(“male-dominated culture”）」と規定している。

また、最近の日本関連記事である、皇太子夫妻に女子が誕生したことを報じた“*It’s a girl! But is it an Empress?*” (2001/12/10)においても、男子しか皇位を継承できない日本の規定を“Remember, folks, Japan’s our ally, so this little gender-role eccentricity falls under ‘acceptable cultural differences.’” と揶揄している。

(5)「米兵あるいはアメリカと犯罪を結びつけたがる日本人」に関しては、先に引いた“1. Japan in the Mind of America 2. America in the Mind of Japan”で、「日本の新聞はアメリカの教育程度の低下と殺人率の増加を詳細に報道する(“Japanese newspapers ... detail the decline in American educational standards and the growth in the murder rate.”)」とし、国松警察庁長官狙撃事件を報じた95年の“Shock to the System” (95/4/10)では、「日本人はこの種の暴力と恐怖をアメリカと結びつけており、日本とは無縁だとプライドを抱いていた(“Japan’s proud sense of itself as a nation immune to the sort of violence and fear that the Japanese associate with America, not their own homeland”)」と指摘している。先ほども引いた“Rape of an Innocent, Dishonor in the Ranks”では、「統計を見れば実際は違うのに、沖縄の人々は米軍基地を置いている代価は高い犯罪率だと信じている(“Okinawans are convinced that part of the ‘price’ is a high crime rate, although official statistics suggest that U.S. service members are on average no less law-abiding than Okinawans.”)」と述べ、新首相に森喜朗がなったことを報じた2000年の“*When Mori May Be Less*” (2000/4/17)では、「Y2K問題に備えてアメリカ人はみんな銃を買った。なぜなら、アメリカで停電が起これば、ギャングや殺人者がやってくる。アメリカ社会とはそういう社会だ。」という森氏の発言が紹介されている(“In February, he asserted that the Americans had all ‘bought guns’ in

preparation for the Y2K bug 'because when electrical power fails in the U.S., the gangs and murderers come out. Such is American society.'”。

また、日本の少年犯罪の増加とその背景にある「ひきこもり」現象を報じた2000年の“Natural-Born Killers?” (2000/8/28)では、「犯罪こそは、日本人が喜んでアメリカ製だと認めるものである(“Crime is the one thing Japan was always happy to admit was best made in America.”)」とし、最近の池田児童殺傷事件を報じた2001年の“Cutting into Innocence” (2001/6/18)においても、「日本は暴力をアメリカと結びつけており、自分たちとは無縁だと確信している(“Japan's confidence that it is immune to the violence that it associates with the U.S.”)」との表現がある。

5. まとめ

“Sex and Race in Okinawa”に現れる5つのテーマは、全てここ10年間の*TIME*誌日本関連記事においても現れてきたテーマである。もちろんだからといって、これら5つ、すなわち、「日本の警察・司法における人権の軽視」「日本のレイシズム」「性的イメージに彩られた日本人女性」「日本のセクシズム」「アメリカと犯罪を結びつけたがる日本人」が、すぐに*TIME*誌におけるステレオタイプだとする事は出来ない。しかし、先にも引いたようにステレオタイプが、“something repeated”だとするならば、これらのテーマは、少なくともステレオタイプの萌芽になりうると考えることはできるだろう。

メディアにおいて何度も繰り返されるテーマに着目することで、ステレオタイプの萌芽が発見できる。そして萌芽が発見できれば、それがステレオタイプになってしまう前に、当該テーマについて積極的に誤解をはらす努力をするなどの「予防措置」を講ずる可能性が生まれるだろう。その意味で、マス・メディアにおいて繰り返し現れるテーマに注意を払っておくことは、今後のステレオタイプ化を避けるためにも意味のあることだと言えよう。

注

- 1) 本稿は日本時事英語学会第43回年次大会(2001年10月14日、於常葉学園大学)での口頭発表に基づく。
- 2) *TIME*誌を分析対象に選んだ理由は、評価の定まった影響力の強い雑誌であることとともに、アメリカ国内版以外にAsia版、Europe版などを発行しており、それらの比較が可能だからである。(本稿でもAsia版との比較を行った。注6参照。)また、*TIME*誌(アメリカ国内版)の日本関連記事全体については、Appendixに2000-2001年のリストを付した(1990-1999年については、拙稿「90年代*TIME*誌記事における対日、対中イメージの比較」『時事英語学研究』第39号[2000]のAppendix参照)。
- 3) 本稿の関心の中心は、新しく形成されつつあるステレオタイプにあるので、90年以降を考察対象とした。

- 4) テキストの精読を基礎に据えるのは、ステレオタイプ研究のような「テーマ単位」(クリッペンドルフ[1989]、89頁)の分析の場合、記事内容の量的分析ではなく質的分析が必要だからである。クリッペンドルフは「テーマ単位」分析の効率性と信頼性における困難さを指摘している(クリッペンドルフ[1989]、91頁)が、テーマ抽出のプロセスを明示するなどして、効率性と信頼性を高める努力をすることは可能である(本稿でもそのように努めた)。困難はあっても、有効な内容分析のためには「テーマ単位」分析は避けて通れない課題ではないだろうか。
- 5) もっともこれらの語は一般的な日本語ではない。『週刊文春』が、2001年7月19日号でこの事件を扱っている(「沖縄女性暴行事件『告発の行方』的全真相」)が、その中でこれらの語を「『アメジョ』。この耳慣れない言葉は、沖縄では、米兵と付き合う女の子たちを指す。語源は、アメリカ女、アメリカ嬢、さらに沖縄方言で『〇〇好き』という言葉の『じょーぐう』に由来するなど、諸説あるが、いずれにしても侮蔑的ニュアンスであることは間違いない。」「なかでも、黒人と付き合う『コクジョ』たちは、本物の黒人シスター顔まけの、濃ゆいファッションとメイクでクラブに通い詰める。」と紹介している。“Sex and Race in Okinawa”は、第11パラグラフで事件の経緯を述べる際、「『週刊文春』によれば」としてその記事の内容の一部引いており、amejo、kokujoという言葉も、『週刊文春』から採った可能性が考えられる。
- 6) ここで、同じ内容を扱った*TIME Asia*版(我々が日本で通常読んでいる版)の8月13日号の記事“Okinawa Nights”と、このアメリカ国内版の記事の構成の違いについて触れておきたい。内容についても細かな異同はあるが、最大の違いは、*Asia*版では、事件の経緯を記した部分(アメリカ国内版では第8から11パラグラフに当たる部分)で始まり、その次にWoodland氏の状況およびamejo、kokujoたち、そして日本のレイシズムを伝える部分(アメリカ国内版では第1から7パラグラフに当たる部分)がくるが、アメリカ国内版では逆の順序で、Woodland氏の状況と日本のレイシズムを伝える部分から始まり、次に事件の経緯がくるという点である。この構成の違いによって、アメリカ国内版ではアジア版に比べて、読者がWoodland氏に同情することがより容易になっている。実際、アメリカ国内版の冒頭の文章、“Timothy Woodland is in a grave predicament.”は*Asia*版には存在しない。

参考文献

- 大石 裕・岩田 温・藤田真文(2000)『現代ニュース論』(東京：有斐閣)
クリッペンドルフ、クラウス(三上俊治・椎野信雄・橋元良明訳)(1989)『メッセージ分析の技法 「内容分析」への招待』(東京：勁草書房)(原著1980)
ジパング編(1998)『笑われる日本人 ―「ニューヨーク・タイムズ」が描く不可思議な日本』(ニューヨーク：ジパング)

「沖縄女性暴行事件『告発の行方』的全真相」、『週刊文春』、2001年7月19日号

Pickering, Michael. (2001). *Stereotyping: The Politics of Representation*. Basingstoke and New York: Palgrave.

“Okinawa Nights.” *TIME* (Asia Ed.), 2001/8/13.

Appendix

2000-2001 *TIME*誌(アメリカ国内版)日本関連記事

- (1) エッセイ類、書評・映画評やごく短いノート類は省略した。
- (2) タイトルの前の()内の数字は、その記事が占めるページ数を示す。なお、1ページ全体を占めない記事でも1ページとした。
- (3) タイトルの後に、何に関する記事であるかを簡単に日本語で記した。

2000年

- ① 2/28 (p. 52) (1) *Fatties in a Fix* (日本の相撲の八百長疑惑)
- ② 4/17 (p. 61) (1) *When Mori May Be Less* (新首相の森は古いタイプの自民党政治家)
- ③ 6/26 (p. 73) (1) *The Joy of Cooking* (日本のテレビ番組「料理の鉄人」のアメリカで収録された特別編について。同番組はアメリカで人気。)
- ④ 8/28 (p. 37) (1) *Natural-Born Killers?* (日本の少年犯罪の増加とその背景にある「引きこもり」問題)
- ⑤ 10/23 (pp. 86, 88) (2) *The Subtle Magic of Koetsu* (フィラデルフィア美術館での本阿弥光悦展)
- ⑥ 10/30 (pp. 58-60) (3) *New Game* (ソニーがプレステ2を発売。また、ゲーム事情について。)
- ⑦ 12/11 (pp. 94-95) (2) *Hybrid Power* (ホンダとトヨタがアメリカで発売したハイブリッドカーについて)

2001年

- ① 1/15 (pp. 42-44) (3) *Rebirth of the Z* (日産の新型スポーツカーが全米で発売。カルロス・ゴーンが日産を復活させつつある。)
- ② 2/26 (pp. 38-40) (3) *Driving Blind* (「えひめ丸」沈没事故)
- ③ 3/5 (pp. 54-56) (3) *Internet A La I-Mode* (日本でのIモードの流行)
- ④ 3/26 (pp. 38-41) (4) *Worst Case Scenario* (日本経済の不振)
- ⑤ 5/7 (pp. 50-51) (2) *A Reformer Takes the Helm* (小泉新首相は旧来の自民党政治家とは一味違っているが前途多難である)
- ⑥ 5/21 (pp. 58-59) (2) *The Battle of Seattle* (任天堂GameCubeとマイクロソフトXBoxの)

ビデオゲーム戦争)

- ⑦ 5/28 (p. 56) (1) The Shock Therapist (竹中平蔵の紹介)
- ⑧ 5/28 (pp. 72-73) (2) In Fantasy's Loop (ビデオゲームの作曲家、植松のぶお)
- ⑨ 6/4 (pp. 68-70) (3) Pearl Harbor's Top Gun (映画「パール・ハーバー」のプロデューサー、Bruckheimerはどのようにしてこの映画を制作したか)
- ⑩ 6/4 (pp. 70-72) (3) What Really Happened (映画と比較しながら、パール・ハーバーの史実を述べる)
- ⑪ 6/18 (p. 37) (1) Cutting into Innocence (池田児童殺傷事件、および、日本の治安悪化)
- ⑫ 7/2 (p. 37) (1) A Kinder, Softer Movie (映画「パール・ハーバー」が日本で公開される。日本人観客に配慮していくつかのシーンの変更も。)
- ⑬ 7/9 (p. 34) (1) Incident in Okinawa (沖縄米兵レイプ事件)
- ⑭ 8/27 (pp. 38-41) (4) Sex and Race in Okinawa (沖縄米兵レイプ事件を巡るレイシズムとセクシズム)
- ⑮ 9/3 (p. 67) (1) Turning the Martial Arts into Mondo Mayhem (K1を創設した正道会館石井館長)
- ⑯ 9/17 (pp. 34-36) (3) Inside the Outsider (改革を目指す小泉首相とその高い人気)
- ⑰ 12/10 (p. 121) (1) It's a Girl! But is it an Empress? (皇太子夫妻に女子誕生)